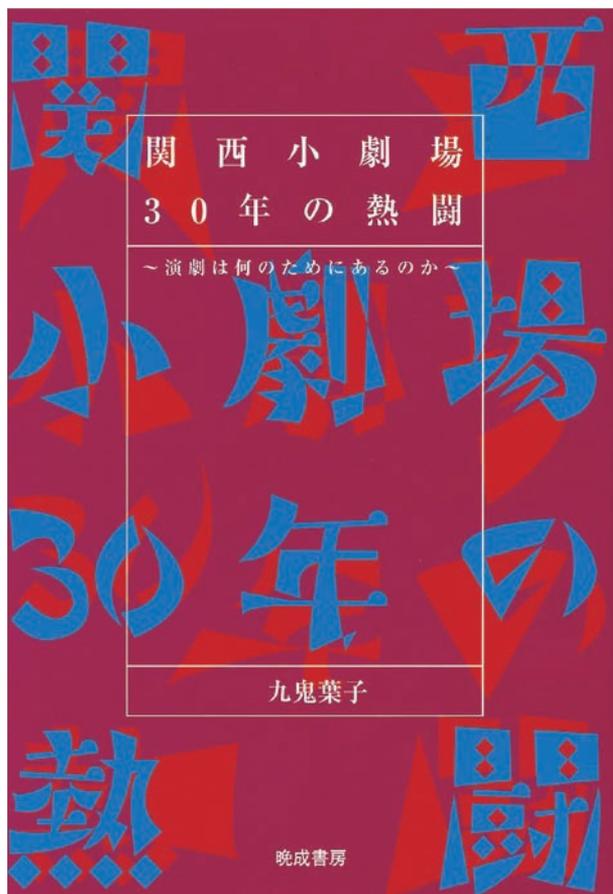


〈書評〉

九鬼葉子『関西小劇場30年の熱闘～演劇は何のためにあるのか～』

出口逸平



学校法人塚本学院 大阪芸術大学短期大学部出版助成第77号
2016年2月1日発行 晩成書房

戦後の関西新劇の流れを記したものは、たとえば『岩田直二の「演劇通信」』（1994年 松本工房）、河東けい「“新劇不毛”と云われた上方、大阪の60年—関西の新劇を支え推進した人々」（『戦後新劇—演出家の仕事②』 2007年 れんが書房新社）、そして阪本雅信『板の上にも五十五年・ガシン語の舞台美術術』（2008年 清風堂書店出版部）があるが、本書は現代の関西小劇場演劇の歴史を語った最初の著作である。しかも関西の劇場・劇団・上演舞台・戯曲・俳優を網羅している点も画期的で、東京以外の地域演劇をこれだけまとまって論じた演劇書はいままでなかった。

本書巻末の作品索引を見ると、関西で上演された250本余りの公演が取り上げられている。その数に驚くとともに、この30年間舞台を見続けてこられた著者の、伴走者としての熱意と覚悟を感じる。

著者は情報誌「Q」「ぴあ関西版」で演劇欄を担当されたのち、演劇評論家として「アイプレス」「劇の宇宙」「日本経済新聞」等に劇評を載せ、現在は大阪芸術大学短期大学部メディア・芸術学科で教鞭をとりながら、「テアトロ」（カモミール社）に毎月関西演劇評を連載されている。

まずは本書の全体構成を紹介しておこう。

- 序章 1980年代以前～関西小劇場の黎明～
- 第1章 1980年代～関西小劇場演劇ブームの発端と興隆～
- 第2章 1990年代～若い力が新しい世界を切り開く～
- 第3章 2000年代～失われた劇場。状況との格闘～
- 第4章 OMS戯曲賞～演劇は時代をどう捉えたか～
- 第5章 関西現代演劇俳優賞～俳優は観客を幸せにする～

第6章 「言葉の劇場」「劇の軌跡」

～演劇はどのようにして作られるのか？ 劇団稽古場密着ルポ～

第7章 舞台の熱闘～劇評1995年～2014年～

第8章 30年の総括と、未来へ…

序章から第3章は1970年代から2000年代にわたる関西の小劇場の活動を描き、第4・5章では関西発の戯曲賞と俳優賞を取り上げ、第6章では関西の劇団稽古場の密着ルポを、第7章では1995年から2014年に関西で上演された様々な舞台の劇評を載せ、最後の第8章では30年間の関西演劇界の動向と今後の展望を語っている。

つぎに各章ごとに内容をたどり、私見を述べたい。

まず序章では1970年代の島之内小劇場と天王寺野外音楽堂の名があげられ、第1章では1980年代に関西小劇場演劇のブームの火付け役となった阪急ファイブ・オレンジルーム、小劇場ブームの中心地となった扇町ミュージアムスクエア(OMS)、東京の劇団の大阪公演の受け皿となった近鉄劇場・小劇場、民家を改装した京都の小劇場アートスペース無門館(のちのアトリエ劇研)、そして公立劇場の兵庫県立尼崎青少年創造劇場～ピッコロシアター、吹田市文化会館～メイシアター、伊丹市立演劇ホール～アイホールといった各劇場の沿革と活動が、プロデュース公演の劇評とともに記されている。続く第2章では主に1990年代にオープンした大阪のウイングフィールド、大阪市立芸術創造館、一心寺シアター倶楽、應典院、そして神戸アートビレッジセンター(KAVC)が、第3章では2000年代の精華小劇場、ウルトラマーケット、インディペンデントシアター1st&2nd、京都芸術センターの活動が取り上げられる。

ここは関西小劇場演劇の歴史を、劇場ごとに見ていこうという視点が斬新であり、興味深い。各劇場の個性、とくにプロデューサーの役割に大きく紙面を割いているのは卓見だとおもう。劇場責任者と劇場スタッフの創意工夫なくして、小劇場という空間は維持できない。80年代のオレンジルームそして90年代の扇町ミュージアムスクエアという場の独特の解放感、個々の舞台の出来不出来を超えていまも忘れがたい。

そして2000年代にはいって大阪市立芸術創造館、精華小劇場、ウルトラマーケットが行政や公的機関との軋轢で閉鎖や変質を余儀なくされる過程は、兵庫のピッコロシアターやアイホール、また京都芸術センターとの対比のなかで、あらためて振り返る必要がある。若い読者には関西におけるアートマネジメントの生きた教材、あるいは反面教師となるだろう。

第4章は1994年にはじまり、2003年の扇町ミュージアムスクエア(OMS)閉館後も続く関西発の戯曲賞「OMS戯曲賞」受賞作についての戯曲評、また第5章は1998年以来、著者と太田耕人が選考する「関西現代演劇俳優賞」受賞者の俳優評となっている。

戯曲はおおよそ40篇、役者は50人近くが取り上げられている。上がっている役者はほぼ全員舞台で見た記憶があるが、評者が10年近く関西を離れていたせいもあって、戯曲の方は半分も読んでいない。その範囲でいえば、第1回大賞の松田正隆『坂の上の雲』、第2回大賞の鈴木俊郎『ともだちが来た』、第3回大賞の内藤裕敬『夏休み』、第4回大賞岩崎正裕『ここからは遠い国』、第5回最終候補作で第42回岸田國士戯曲賞を受賞した深津篤史『うちやまつり』、第6回大賞土田英生『その鉄塔に男たちはいるという』など、比較的初期の1990年代の受賞作・候補作に、秀作や問題作が目白押しだったことにあらためて気付かされる。最近は年度によってかなり作品の質にばらつきのある印象だが、関西若手劇作家の登竜門として貴重な存在だ。特にいまは関西発の演劇雑誌がなくなり、一般の観客が上演台本を目にする機会はほとんどなくなった。戯曲どころか、劇作家の名前さえ知られていないというのが現状だろう。その中で受賞作や選評・選考経過が『OMS戯曲賞』というシリーズ冊子になっているのはありがたい。劇作に興味のある方は、大きな図書館で探して読んでみてほしい。

俳優についていえばMONOの金替康博・水沼健・奥村泰彦・尾方久久・土田英生、太陽族の森本研典・工藤俊作、桃園会の江口恵美・紀伊川淳・亀岡寿行・森川万里、南河内万歳一座の荒谷清水、ピッコロ劇団の亀井妙子、さらに内田淳子・二口大学・武田暁といった面々の舞台が、次から次へと浮か

んでくる。振り返ると、多くが劇団所属でフリーはわずか、またはいまは舞台上で姿を見なくなった人も少なくない。全国の地域演劇に共通する「俳優陣の層の薄さ」は、やはり関西でも見過ごせない課題だろう。

第6章は1本の芝居がどのように出来上がっていくか。その創造のプロセスを稽古場で密着取材したルポルタージュである。「AI・PRESS」(アイホール)や「劇の宇宙」(財団法人大阪都市協会)に連載された雑誌記事のなかから、11本が選ばれている。

劇団としては太陽族、PM／飛ぶ教室、劇団新感線、南河内万歳一座、桃園会、劇団犯罪友の会、維新派、くじら企画が上がっているが、個人的にはオウム真理教事件に材を取った『ここからは遠い国』(太陽族)の演出の工夫、『近松ゴシップ』(メイシアタープロデュース)における土田英生の演劇作法、『よぶには、とおい』(桃園会)の深津篤史の演出法、野外劇『キートン』(維新派)の創作方法の個所を特に興味深く読んだ。とりわけ桃園会の深津篤史(1967～2014)や維新派の松本雄吉(1946～2016)の演出法や発言は、いまとなっては得難い記録だ。こういう現場に密着したスタイルは、やはり著者ならではの仕事だと感じ入った。第5章とあわせ、これから関西の芝居を観てみたいという方には、劇団や俳優を知る格好の道しるべとなるにちがいない。

第7章は1995年から20年間にわたって、主に「日本経済新聞」に掲載された劇評から60本余りを載せている。劇評は、見た芝居の空気を思い出させてくれると同時に、見逃した芝居の良さも教えてくれる。劇評を読みながら、MONOの『初恋』(1999年)・『その鉄塔に男たちはいるという』(2001年)・『チェーホフは笑いを教えてくれる』(2003年)・『うぶな雲は空で迷う』(2013年)・『のぞき穴、哀愁』(2014年)、桃園会の『北村想の宇宙』(『屋上の人』、1998年)・『どこかの通りを突っ走って』(2000年)・『かえるでんち』(2001年)、維新派の『夕顔のはなしろきゆふぐれ』(2012年)、『宇宙の旅、セミが鳴いて』(鈴江俊郎 2003年)や文学座の『大空の虹を見ると私の心は躍る』(鄭義信 2014年)といった秀作舞台の雰囲気

を思い出し、また見過ごしていた場面の意味を知ることができた。そして見ることのできなかつた桃園会『blue firm』(2002年)や維新派『青空』(1995年)・『呼吸機械』(2008年)の劇評を読み、どこかうらやましい思いを抱きながら頭の中で舞台を想像した。

なお余談ながら巻末に年表があると、若い読者や研究者により一層便利だったように思う。

第8章はこれまでの総括と今後の展望として、(1) 民間から公共へ、(2) 演劇を「高める」から「広げる」発想へ、(3) 個人経営の小劇場・カフェの活況、(4) 他地域の劇場との連携、(5) 野外演劇の雄姿、(6) 公共ホールの動き、(7) 未来への提言、(8) 演劇は何のためにあるのか、の八つの項目が立てられている。このなかでは特に、(1) (6)に上がる公共性と、(4) (7)という他地域との交流の二点が重要だと思う。

私は学生演劇や広い意味でのアマチュアリズムこそが、小劇場演劇の苗床ではないかと思う。そして現代では公共との連携、そして他地域との交流なしに小劇場の衰退は食い止められないと感じている。とくに活動や交流の核となるべき「芸術センター」は、民間では難しい。ところが大阪では近年逆の動きが加速している。著者は小劇場の未来に決して悲観的ではないが、第2・3章さらに第8章でも現状への危機感を隠そうとはしていない。

今後関西の小劇場はどうなっていくのか。これから30年の歴史を見渡した続編を期待したい。

